

第2回広聴事業「特別支援教育について」

概要

教育委員会広聴事業は、教育長と教育委員が、児童生徒・保護者及び教職員などの皆様と直接対話による意見交換を行うことで、より実情に沿った政策立案をしていくために実施している。令和5年度(2023年度)第2回は、特別支援教育をテーマに、2月2日(金)にあおば支援学校の視察を実施し、2月7日(水)には校長、教頭、小学部の教諭2名、中学部の教諭2名、養護教諭、栄養教諭、事務主任の9名の職員と意見交換を行った。



意見交換の内容

医療的ケアについて	
意見・質問	回答
医療的ケアが必要な児童生徒と配置されている看護師の人数、実態と課題についてはいかがか。(西山委員)	・医療的ケア児は小学部に2名、中学部に1名おり、看護師の配置は2名。胃ろうやインシュリン投与等を実施している。医療的ケア以外の時間はそれぞれの学年学級に学級支援員としてついている。(養護教諭)
他の児童生徒と一緒に授業を受けるにあたって支障や問題点はないか。(西山委員)	・胃ろうでは時間で水分補給が必要になるが、担任の先生と調整して水分補給の時間を確認しており、活動に支障はない。(養護教諭) ・校外学習で遠足へ行く際には小さなテントを持っていき、そこで胃ろうをしており、ほぼ同じ活動ができている。(校長) ・看護師が休まなければならない場合や校外活動に同行しなければならない場合は総合支援課から応援として来てもらっている。(教頭)

進路について	
意見・質問	回答
生徒は進路をどのような基準で決めているのか。(西山委員)	・現状は全ての生徒が特別支援学校高等部に進学している。オープンスクールで学校生活や授業の様子を見たり、体験したり、高等部の個別の教育相談や施設、設備の話を伺ったり、公共交通機関の利用ができるお子さんは実際に通学の時間帯に保護者と路線バスに乗って行って確認するなどして総合的に判断し、ほとんどの中学3年生は高等部に進学しているが、自宅からの通いやすさでの判断が多いと感じている。(教諭)
進路は希望どおりになっているのか。(小屋松委員)	・これまでの9名の卒業生は、第1希望の特別支援学校の高等部に進学している。(教諭)

近隣校等との交流について	
意見・質問	回答
あおば支援学校における研修会についてはいかがか。(澤委員)	・昨年度までの2年間は「ケース会議の進め方」ということで研修を行ってきた。今年度からはこどもを中心とした効果的な連携について実施し、スクールソーシャルワーカー(SSW)との連携、職員間の連携、保護者との連携について計3回実施した。研修会にあたっては、SSWやこども発達支援センターの方に来てもらった。(教諭)
小学校との交流についてはいかがか。(澤委員)	・小学部では、開校時は新型コロナウイルス感染症の影響で実施が難しかったが、昨年くらいから年度当初に職員の顔合わせ、学年同士の交流会、音楽会や運動会、発表会において相互に見に来るなどの行事の交流がある。また、城東小学校のランチルームを使っの給食や、城東小学校の運動場で体育を行う機会があり、職員がついていける時だけではあるが、場所を共有して交流しており、日常的に交流ができています。(教諭)
中学部での交流についてはいかがか。(澤委員)	・小学部と同様に新型コロナウイルスの影響があり、人との関わりが難しかったが、施設設備面で、藤園中学校の体育館やプールを使用したり、朝の運動を武道場で行ったり、実習のための畑のスペースで野菜を収穫する際に藤園中学校の特別支援学級

	の生徒と一緒に活動した。また、剣道の授業の際、藤園中学校の剣道の先生にゲストティーチャーとして指導してもらった。ランチルームで一緒に給食の時間を過ごしたり、休み時間にプレイルームで一緒に遊んだりといった活動は行っている。小学校、中学校及び特別支援学校が繋がっているという良さを活かして、日常的な交流、身近な関わりをやっていけたらいいと思う。(教諭)
施設の共有やふれあいよりも長い時間、例えば通常学級の児童生徒と一緒に授業を受けるようなことはあるか。(小屋松委員)	・現時点では、教育課程に位置付けてやっているものはなかったと思うが、そのようなことが実現可能な距離感ではあると思う。(教諭)
視察では作業学習の様子を見せていただいたが、一緒に作業ができるなど広げられるといいと思う。(澤委員)	・作業学習については、藤園中学校の特別支援学級の生徒と一緒に作業をすることや、場所をお貸しして作業をすることもできる旨のご案内をしている。(教諭)
地域との交流についてはいかがか。(澤委員)	・城東小学校の PTA からイベントにブースを出してよいと言っているが、こちらの準備が整っていない状況。授業や特別活動以外でも地域との交流ができたらいと思う。販売についても現在は保護者向けだけだが、中心市街地に近いという立地も活かせればとは考えている。(教頭)
小さい時から地域の方に知ってもらえていることは大事だと思うので、居住地交流についてはぜひ頑張っていたきたい。(澤委員)	
小中学校との交流について、交流が密になるとトラブルも起こると思う。これは、悪いことではなくトラブルが起きるくらい密な交流ということで素晴らしいことと捉えているが、あおば支援学校ではこれまでどのようなトラブルがあったか。(苫野委員)	・本校の児童生徒は下校が早く、放課後に一緒に活動することや遊ぶことはできない状況。休み時間の交流にも職員が必ず付いており、今のところトラブルは起きていない。(教頭)

いじめについて	
意見・質問	回答
・いじめだということを認知できない児童生徒や訴えることが難しい児童生徒がいる中、学校としてはどのようにいじめを認知していくのか。(教育長)	・本校の対応として、複数の職員の視点から判断し、わずかな気づきも丁寧に保護者に説明、報告し、素早く判断し行動している。また、いじめの認知件数は0件だが、アンケートで嫌なことがあったと回答する児童生徒もあり、児童生徒からの説明が難しい場合は根気強く、1対1で聞き取りを行うなどしている。(教諭) ・仲良くなりたくて近づくことを嫌なことをされたと捉える子もあり、嫌なことをした側、された側の話をよく聞き、した側の意図を伝えることでされた側が安心するケースが多いと思う。(教頭) ・スクールバスでの様子も共有している。 ・いじめが起こらない習慣づくりとして、授業がわからない・つまらないと嫌な気持ちになりいじめにつながるのではないか、という点から分かる授業づくりに取り組んでいるほか、いじめを許さない、いじめの起こらない優しい学級づくりにも全員で取り組んでいる。また、職員研修では自分が気づかなかったことを養護教諭や事務、給食の先生が気づいてくれたという意見があり、そのような点は本校の良さだと思う。(教諭) ・連絡帳による保護者とのやりとりや放課後等デイサービスと連絡をしており、少し元気がないなどのこどもの変化を、特に自分で表現することが難しいこどもについては慎重にみている。(校長)
普段見ていて問題だと思うことはあるか。(教育長)	・どうしても手が出てしまうこどもについて特に気にしている。職員が一生懸命止めるが、それがどう伝わっているか、指導をどこまでわかってくれるか、こども間だけでは解決できないところがあるため、職員がどう関わっていくかが大事だと思っている。(教諭)
保護者から「これはいじめではないか」といった訴えはあるのか。(教育長)	・小学部では今年度は聞いていない。(教諭) ・中学部でもいじめととらえている件数はない。小学部も同様だと思うが、登校してから下校するまで児童生徒が一人だけにいるという時間帯はほぼなく、常に誰かが見ている。昼休みのプレイルームに

	も職員がおり、トイレも交代で行っているため、常にこどもたちの様子を見守っている状況。(教諭) ・いじめではないが、スクールバスで嫌なことをされた、といった話があった際には席を配慮するなどいじめが起こらない状況となるよう工夫している。(校長)
--	--

スクールソーシャルワーカー (SSW) 及びスクールカウンセラー (SC) の活用について	
意見・質問	回答
・SSW や SC を活用する場面は多いか。(澤委員)	・SSW については、今年度は年間を通じてかなり相談し、間に入ってもらったこともあった。SC は前半、1 学期に多く、入学してきて不安なお子さんと家庭の事情でとても不安な状態のお子さんのカウンセリングをしてもらうなどした。
・SSW は福祉に関する部分が主だが、家庭の事情など、保護者への対応をしているのか。また、家庭的な事情を抱えておられるところも多いのか。(澤委員)	・家庭の方に支援が必要なこともあり、保護者に直接伝えにくい部分を SSW の立場や違う関係機関の方から伝えてもらうことで、家庭の状況が改善し、こどもへのもっとよい支援ができるのではないかと入ってもらっている。また、保護者に話を聴いてもらえる、繋がれるという安心感を持っていただくこともよりよい支援につながると考えている。家庭的な事情を抱えているところも多く、保健こども課や保護課とも連携して繋がってもらっている。(教頭)

指導について	
意見・質問	回答
・担任は持ち上がりか。(西山委員)	・必ず持ち上がりというわけではない。一緒に活動することも多く、ほとんどの先生が担任以外の児童生徒についてもよく知っている状況である。(校長)
・教科指導上の課題についてはいかがか。(西山委員)	・小学部の 1 年生ではひらがなが読める子もいれば、そこにある物に触れる、という認知の子もあり、力の差がある。今は担任 2 人が 3 人ずつ、教科によって個別に時間をとっているが、1 人に対応していると他の子への対応が難しくなるため、時間を区切ったり、一緒にできる活動と個別の活動の時間を組み合わせたりすることで実施している。また、全体

	の活動では個別に目標を決めている。1人対して使える時間は短い、毎日の積み重ねで少しずつできるようになり、長時間座ることができるようになる、ひとりでできる活動が増えるようになるなどの成長がみられる。(教諭) ・ 中学部も同様に、6名1クラスに担任2名である。特別支援教育は一人ひとりのこどもの教育的ニーズに基づき適切な支援を行うことで自立して社会参加につながっていくということがよさなのは理解しているが、1人の職員が3人の手立てを準備する、見守っていくことは難しいため、個別を前提としながらもある程度の集団に関わる支援しか展開できないところにはもどかしさがある。もっとじっくりそれぞれの生徒に関わることができればよりその良さを発揮できるイメージは持ちながらも現実的には難しい。先生の休み等で1人で6人を見る場合は、授業よりも生徒たちがその場に、その時間いかに落ち着いていられるかという対応をしなければならぬ難しさが大きい。(教諭)
・ ICT の活用についてはいかがか。 (西山委員)	・ 教室を撮影したり、先生を写真に撮ってどんな先生かまとめるたりするなど、1人1台のタブレット端末をこどもたちに合わせて活用している。(教諭)
・ ICT 専門の支援員は必要ではないか。 (西山委員)	・ 現状では詳しい先生もあり、その先生方と一緒に学びながらやっているところ。教育センターも距離が近く、本校に来て対応してもらったと思う。(教諭)
・ 他の特別支援学校で発生している問題で、あおば支援学校でも起こりうる、教育委員会が想定しておくべき問題はあるか。(教育長)	・ 他の特別支援学校では教員の不適切な対応があり課題になっている。現在のところ本校では大きな問題は起こっていないが、事実を伝えることが難しいこどもで、行動面で難しい場合の教員の対応については、物を壊す、友達に怪我をさせるような危険行為を体を押さえて制止することは体罰には当たらないことを確認している。正確に事実を確認するためにも複数人で対応するようにしている。(校長)
・ こどもへの性に関する生活指導はどのように行っているのか。 (澤委員)	・ 小学部では年に6回、中学部では養護教諭が関わるものが5回、保健体育の先生が企画しているものが5回、計10回の保健の授業がある。知識を与えるだけでは身につかないため、毎年繰り返しながら

	少しずつ幅を増やしている。また、今年度は中学部の3年生で性に関する指導の授業参観を行い、保護者に学校での指導を見ていただいた後に、いのちの大切さを考える講演会の講師も入って、悩みや授業の感想についてグループワークを行った。本来はより深い学習をおこないたい、現在のところは被害に遭わない、体に触らないといった範囲までしか指導ができていない。(養護教諭)
--	--

教員の負担・人手不足について	
意見・質問	回答
・保護者の期待が大きすぎて先生方の負担が大きくなっているようなことはあるか。(村田委員)	・個に応じた目標や手立てを設定して個に応じた支援をしていくが、個別の対応は難しい部分がある。保護者の方から別の場所で個別に対応してほしいという希望をされた場合は、対応可能な部分と不可能な部分についてご理解をいただいている。場合によっては、保護者のニーズとこどものニーズ、学校が可能なことと不可能なこと等、専門医のアドバイスを交えて対応している。(教頭)
・人手が足りない印象を受けるが、学校としてはいかがか。(西山委員)	・中学部では、朝の運動を藤園中学校で行っていたところ、生徒が急に動き出し、城東小学校の児童にぶつかることが懸念されたため、場所を移して教室でのラジオ体操や3階でのウォーキングを朝の運動としている。どの特別支援学校にも当てはまると思うが、より多くの見守りの目があれば活動場所の制約も少なく、激しく走った方がいいような子も満足できるような活動ができるのではと考えている。 ・6人の定員が揃っていなかった頃は、4人のこどもに2人の先生ということで、両手をつなげば城東小学校の運動場や体育館、音楽室まで行くことができ、朝の運動は小学部も城東小学校の運動場で思いっきりできたが、現在はそれができず、本当は広い場所で運動させたいが安全を考えると行けないという状況はある。(教諭) ・巡回相談が年々増えてきていたが、担当の先生が安全の確保のため担任に入らなければならぬ対応できる件数が大幅に減っている。定数上はしっかり

	配置されておりありがたいが、1 学級を 2 人ずつ担任すると 1 名足りないような状況であり、求められているセンター的機能が十分に発揮できない部分があると思う。どこも人が足りていないことは理解しているが、特別支援教育推進計画において本校に求められているものを発揮し、熊本市の特別支援教育の推進のために貢献できたらと思う。(教頭) ・低学年ではひとりひとりの対応が必要で、6 人を 2 人で見るとは難しい状況があり、学部主事はほぼ 1 年生か 2 年生に入っている状況。安全安心な学校生活のために、養護教諭も事務の先生も放課後の下校指導に入っている。学部主事と巡回相談者は担任外で配置できればと考えている。(校長)
・学級支援員の配置状況はどのようなになっているのか。(澤委員)	・ 2 名の看護師に医療的ケア以外の時間に学級支援員をしてもらっている。(校長)
・見守りの人数が足りず施設が使用できないことは、施設が共用だからこその問題でもある。(教育長)	・ 共用には良さもあるが、課題もある。(校長) ・ 施設を持つ学校の教育課程があり調整を要するため、使いたい時に使えないこともある。(教頭)